

都市なき古墳時代社会の権力構造

— 政祭葬三形態の分立システム —

寺前 直人*

日本列島における最初の都市形成は、ゴードン・チャイルドの基準を用いると弥生時代中期以降の交易拠点として発展した集落遺跡にみいだすことができる。しかし、より大きな権力が形成される古墳時代において都市の存在はむしろ希薄となる。本稿では、考古学的資料と『記紀』等の文献を用いてその要因を分析した。その結果、集住に不可欠な水・燃料・食料の供給体制の維持が当時の技術的、社会的な段階では困難であり、不十分なインフラ下で疫病等が生じたために、あらたに都市をもたない政体運営システムが希求されたと考えた。それがユーラシア大陸の諸文明では都市に集約されていた権力の機能を、短期集住・市的空間としてのモニュメント（古墳）造営拠点、政治拠点である短期・小規模で営まれる王宮（ヤケ）、器物の工房が付加された祭祀センター（ヤシロ）の3つに分立させた古墳時代独自の体制なのである。そして、空間的に分化した諸勢力を結びつけたのが古墳副葬品にみられる非実用品を中心とした稀少財の頻繁な授受と饗宴であると考えた。このような稀少財授受の連鎖が、都市空間を有さない社会において離れて生活する個人や集団を結びつけ、お互いの社会的地位や権限を相互承認する場を提供したのである。

キーワード

弥生時代、古墳時代、都市、祭祀センター、財の循環

目次

- | | |
|-------------------------------------|----------------------------------|
| I はじめに | 3 古墳時代における祭祀施設の機能 |
| II 考古学と都市論 | 4 文献資料と伝世資料からみる石上神宮の機能 |
| 1 都市論という幻想 | 5 循環する財がつなぐ古墳時代の社会関係 |
| 2 チャイルドによる10指標の再定義 | 6 石上・布留遺跡における生産拠点 |
| III 弥生時代集落の都市的評価 | 7 古墳造営拠点の性格 |
| 1 人口規模と集住 | — 権力を形成しない集住と交流 |
| 2 集住維持に必要なインフラ(食料・水・燃料) | V まとめ—都市なき権力構造を維持した日本列島独自の社会システム |
| 3 分業 | 1 古墳時代における都市機能の分立 |
| 4 交易と都市性 | 2 住環境維持のための社会機能の分立 |
| 5 纏向都市論と古墳時代における都市の消滅 | 3 分散した政治集団を結びつける器物の頻繁な授受 |
| IV 都市なき権力構造を可能とした都市的機能分立型古墳時代政治システム | VI おわりに |
| 1 モニュメント・宗教施設の構築を契機とする都市形成 | |
| 2 古墳時代の王宮とその機能 | |

* 駒澤大学

I はじめに

日本列島における都市の誕生は、7世紀末の藤原京（新益京）を契機とする伝播論的な評価が根強い。一方、水田稲作の開始期である弥生時代以降の大規模集落に、都市的機能の発生をみいだす見解もある。後にのべるようにゴードン・チャイルドの指標を用いて、日本列島における自律的な都市の形成が想定されたこともあった。ただし、弥生時代中期から古墳時代前期初頭、紀元前3世紀から紀元後3世紀頃には都市と評価される集落遺跡が散見されるにもかかわらず、その後は藤原京登場までの300年間以上にわたり、都市的な評価を受ける遺跡はみられなくなる。このことが日本列島における連続的な考古学的都市論を困難にしており、日本列島における国家形成をめぐる議論にも、大きな影響を与えてきた。

本稿は、このような課題に基づき、世界各地の古典的な都市論をふまえたうえで、都市の空白期が生まれた要因を考古学的に論じる。

II 考古学と都市論

1 都市論という幻想

考古学における都市論や国家論は、ゴールポストが動く議論（Moving the goalposts）の典型であるかもしれない。それは「美しい」土器などと同義であり、都市や国家の定義を明示、あるいはその用語をもちいる目的と意義を明確にしないかぎり、大きな集落や特異な遺構が検出された遺跡に対する美辞麗句に陥ってしまいかねない。

この本質的な危惧をふまえ、これまでも都市の成立を論じた考古学者は、定義や必要条件を厳密に設定してきた。なかでも、ゴードン・チャイルドが1950年に「The Urban Revolution」で示した基準は、ナイル川、チグリス・ユーフラテス川、インダス川流域に加えて、中米のマヤ地域の資料をとりあげた物質的で明示的な議論であったこともあり（Childe 1950）、世界各地におけるその後の考古学的な都市論に大きな影響を与えた。日本列島における都市論もその例外ではない（都出 1997；佐々木 2007）。ただし、タイトルから分かるように、彼の目的は史的唯物論的な社会発展のプロセスにおける新しい経済段階に到達した結果とし

て、都市の形成を位置づけることにあった。彼自身、「革命の象徴として、先史時代の都市を提示する」と明言しているのだ（Childe 1950: 3）。したがって、次にふれる有名な10の指標は、単なる古代都市の認定基準の羅列ではなく、彼の想定する都市形成の契機と都市形成の過程における副産物が混在していることには注意が必要である。

2 チャイルドによる10指標の再定義

まず、10の指標を確認しておこう。簡潔に要約するならば①集住、②分業、③神租・租税、④記念物、⑤労働の分離、⑥文字・数字の使用、⑦暦の使用、⑧専門的芸術家、⑨長距離交易、⑩専業工人の定住となる。しかし、チャイルドはそれぞれの要素の連動や関係を重視しており、その関係は図1のように整理できる。それは新石器革命の進展による余剰の登場と人口密度の増加を前提（A）とし、余剰がモニュメント（monumental public buildings）造営のために神租（tax to an imaginary deity or a divine king）が集約されることが繰り返されることによって（③と④）、しだいに継続的な余剰収奪・集約システムが構築される。この社会的余剰が集約された新しい空間で、それら余剰に依存する専業工人（full-time specialist）をはじめとする非農業従事者の定住が達成される（②）。このようなプロセスをへて、人類は都市（B）をうみだしたと考えたのである。詳しくみていこう。

まず、①集住に対する事実関係とそれに対する彼の認識である。チャイルドは、メソポタミア地域やインダス地域の発掘成果に基づき、シュメール文化の都市人口を7,000～20,000人と見積もり、インダス文化のハラッパとモヘンジョダロも、それに近い人口とみる。なお、エジプトとマヤについては、公共事業の規模から同等の人口規模を推定する。チャイルドが労働集約の物的証拠として公共建造物を捉え、そこから人口を推定するという演繹的な論を展開している点には、注意が必要である。

チャイルドのあげた1万人という具体的な数値が注目されがちであるが、同時に彼は最初の都市は現代の多くの村（villages）よりも小さく、先行する集落よりは人口密度が高いという相対的な差異を重視している。さらに、その人口構成はほとんどが農民であり、都市に隣接する土地で農業に従事していたとした点

を、ここでは強調しておきたい。農民が多数を占めるという認識はM. ウェーバーの都市論¹とは大きく異なる(ウェーバー 1951)。ウェーバーの議論をふまえて、人口全体に占める一次産業従事者の比率が低いことを都市認定の条件にあげる研究は多い(都出 1997; 寺沢 1998a; 武末 1998)。しかし、ウェーバーのそれとは異なり、チャイルドがイメージした初現的都市は農民主体であってもよいという点は重要である。

その他の指標、②分業、③神租・租税、④記念物の関係は図1のように単純化できる。③神租や租税は、④記念物、すなわちモニュメントを投資の対象とし、この正のフィードバックが安定化、継続化することによって、②分業に付随する⑤知的労働と肉体労働の分離、⑥文字・数字の使用、⑦暦の使用、⑧専門的芸術家の成立や安定的な継続をもたらし、結果として⑩専門工人の定住が進む。また、一連の議論のなかで、チャイルドはわずかな余剰生産が宗教的寄付(tithe: 十分一税)や税として想像上の神格や神聖王に集中することで、生産性の低い段階でも効果的な資本の運用がはじめて可能となったと考えており、王や神官層による強制力や財の収奪性が強調されてはいない。

⑨とした長距離交易についても、彼は興味深い議論を進めている。まず、領域をこえた「国際的」交易の対象は、最初のうちは主に奢侈品(luxuries)だったと述べ、必ずしも必需財の交易が念頭にないことが読み取れる。これは「都市」民の主体が農民であり、「都市」周辺にかれらの耕地があることから、最優先の必

需財である食料は自給的であるという理解に起因するかもしれない。ただし、すでに工業素材が交易品に含まれており、旧世界では金属素材、新世界では黒曜石がそれにあたるとも指摘している。最初の都市は、これまでの新石器時代の村にはなかったほど、長距離貿易がもたらす材料に依存していたとするものの、都市の指標としては交易や市場の役割や存在を必ずしも重視してはいない。

一方、藤本強は、概説的に世界の都市論をまとめるなかで(藤本 2007)、西アジア・ヨーロッパの都市は、交易を通して生活を効率化する「市」を核として成立したのに対して、中国をはじめとする東アジアの都市は、政治センターとして地域を統治する機能、「都」を基に誕生した「都城」がほとんどであるという展望を示した(藤本 2007: 10-11)。

この世界史的な理解の是非は後ほど論じるとして、日本列島における都市論も前者の交易やマーケットを重視する自律的な弥生時代の都市論と、後者の中国的な「都城」像を投影した政治拠点としての藤原京以降の都市論とに大きく二分されているのが現状である。なお、同書において藤本は、弥生時代の佐賀県吉野ヶ里遺跡や大阪府池上曽根遺跡、古墳時代中期の群馬県三ツ寺I遺跡を例にあげて、これらに都市的性格を読み取るものの、規模や遺構集中度の点から都市とは認定できないとする(同: 151)。ただし、後述するように藤本が都市の考古学的基準とした数十haといった面積の基準や5千~1万人という人口の基準をみやす

可能性が高い弥生時代の集落遺跡の存在が北部九州地域で指摘されている(吉留 1999; 久住 2008)。

チャイルドの枠組みに議論を戻そう。彼の10の指標は、旧大陸のみならずマヤ地域といった新大陸にも適用できる基準を意図したゆえの高度に抽象化されたものである。また、先行した都市の模倣や影響による都市形成は想定されておらず、自律的に都市を形成する現象、すなわち一次的な都市出

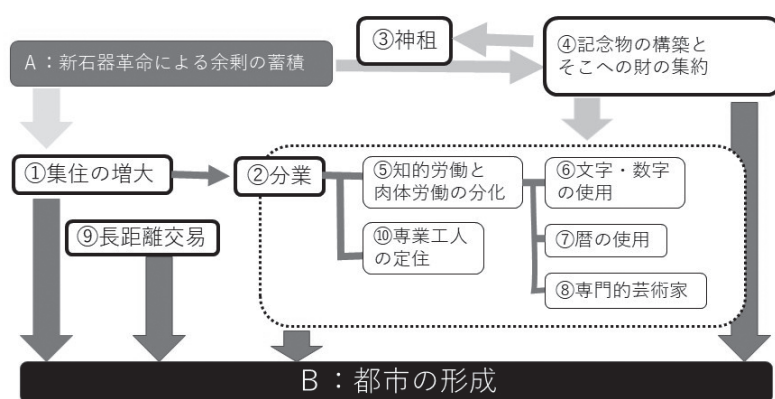


図1 Childe1950における都市形成過程

1 マックス・ウェーバーの議論でも、農耕市民都市なる概念が語られている(ウェーバー 1951: 16-18)。そこでは古代の典型的な都市(ポリス)は、十分な耕地を有する農耕市民で構成されていることを指摘する。ただし、彼が「古典古代の都市の基礎の上には、近代資本主義も近代国家も成長しなかった。これに反して、中世における都市の発展は…中略…、この両者の成立のための最も決定的な一因子として、無視しえない重要性をもっている」という展望(同: 258)に基づき、近代資本主義が西洋においてのみ成立した要因を追究する「手段」として、欧州の中世以降の都市に議論を限定している点には注意が必要である。この点を留意せずに日本列島を含む古代とそれ以前の集住形態を論じるにあたり、ウェーバーの都市概念を用いることは無用な混乱を招きかねない。

現のプロセスを論じることを主眼としている。つまり、わずかな余剰しか生み出せない生産技術の段階であっても、あるいは王墓などに実体化される権力の存在が明瞭でない状況であっても、都市を生み出しうるミニマムのきっかけとして構想されたのが、先の10指標に基づくメカニズム（図1）なのだ。なかでも、最初の引き金として、社会的余剰の集約対象となる④記念碑的公共建造物（monumental public buildings）の登場を本稿では重視する。すなわち、人々の自発的な「投資」対象となる魅力的な宗教的モニュメントの出現と分業や富の集約の関係を本稿では明らかにしたい。

Ⅲ 弥生時代集落の都市的評価

紀元1世紀以降の日本列島社会が都市をもつ中国王朝と交流し、王号や将軍号などを与えられていたという事実は、広く知られている。しかし、その前段階にあたる弥生時代中期後半に顕在化する大型集落が、1990年代には都市論の対象となったことがある。その論点と具体例根拠についてチャイルドの指標を念頭に整理する。

1 人口規模と集住

1960年代以降の開発に伴う大規模調査の拡大は、面的な遺構群という成果を日本列島の考古学者にもたらし、集住人口の推定が進んだ。弥生時代における人口推定は、環濠内が全面発掘された神奈川県横浜市の大塚遺跡の成果を基準とする場合が多い。大塚遺跡は台地上に位置する高所立地の環濠（濠）集落である。環濠は長径約200m、短径約130mの楕円形であり、環濠内側の面積は22,000m²、あるいは21,000m²とされる（武井編 1991；小倉 2015: 27）。環濠内の面積は濠の幅は平均すると上面で4.0m、下面で2.0m、深さは1.5～2.0mであった。環濠内側からは、弥生時代中期後葉に属する住居が90棟検出されており、これらは三小期に区分できるといえる。したがって、同時存在の住居は25～30棟とされ、1棟あたりの収容人数を5名として、人口は150人程度と推定されている（都出 1989: 213）。1棟あたりの専有面積は700～880m²となる。

また、大阪府和泉市・泉大津市池上曾根遺跡の調査成果に基づき、調査担当者でもある乾哲也は、次のように人口規模を論じた。まず、遺跡規模が最大化する弥生時代中期中葉・後葉段階の広さを南北450m、東

西350m、面積110,000m²としたうえで、居住域は内濠内外とみて20,000m²と仮定する。面積的には先の大塚遺跡と同規模である。ただし、居住域の遺構密集度を念頭に1棟あたりの専有面積を100m²として、200棟の住居数を想定し、1棟あたり5人の居住数を前提に1,000人の人口を想定した（乾 1996: 20）。乾の議論では遺構密度に基づき、大塚遺跡の8倍近い人口密度を仮定している点には注意が必要である。さらに広瀬和雄は大塚遺跡よりも面積の広い佐賀県吉野ヶ里遺跡、大阪府池上曾根遺跡、奈良県唐古・鍵遺跡、愛知県朝日遺跡をあけて、その推定人口を500～3,000人とする（広瀬 1998: 40）。

ただし乾や広瀬が前提とした数値的根拠には異論も多い。例えば、池上曾根遺跡の調査を担当した秋山浩三は、環濠内外に谷地形の湿地が発達していたことを指摘し、乾や広瀬らの算出方法に疑問を投げかけている（秋山 2007: 761）。また、唐古・鍵遺跡の調査を長年担当した豆谷和之も、環濠内部には谷状部や低湿地部など非居住空間の存在することを重視し、広瀬の推定人口数を疑問視する（豆谷 2003）。若林邦彦も、唐古・鍵遺跡の発掘調査報告書の成果をふまえ、遺跡中央部と東端部には居住に不適な窪地が展開していたとみる（若林 2018: 23-24）。

一方、愛知県名古屋市・清須市朝日遺跡の調査および報告書を作成した石黒立人は、次のような人口推定を行っている（石黒 2004）。石黒は、朝日遺跡の居住域全体を14ha（140,000m²）と想定したうえで、同県の一色青海遺跡における建物検出の成果に基づき、竪穴建物1棟に必要な面積を500～750m²と考え、朝日遺跡において一時期に存在した棟数を180～280棟を算出する。うち70%を住居とすれば126～196棟、一棟あたり5人と仮定して人口を630～980人が居住していたとする。1棟あたりの専有面積は、先に紹介した武井や都出らによる大塚遺跡環濠内のそれに近い。すなわち、1,000m²（約300坪）、一辺33m四方の空間が5人前後の「世帯」の専有空間となる。竪穴建物あるいは掘立柱建物を基本とする弥生・古墳時代における人口密度としては、この数値が一つの基準になる。なお、居住域のみではないために直接的な対比は躊躇されるが、福岡市比恵那珂遺跡群は130ha（1,300,000m²）、福岡県春日市須玖岡本遺跡群は100ha（1,000,000m²）とされており（吉留 1999）、朝日遺跡の十倍近くとなる。したがって、当該期の玄界灘沿岸地域では5,000人から1万人近い集住が形成されていた可能性がある。

以上の議論をふまえると、紀元前1世紀までの九州から東海地方において、それまでにない人口集中集落が形成されることは、遺構が検出される面積という考古学的事実からは認められる。その人口規模や推定の根拠は研究者によって異なるが、石黒のような慎重な立場、すなわち乾や広瀬よりも人口密度を小さく見積もる立場にたっても、朝日遺跡では1,000人近い集住が想定され、さらにこの十倍近い集住、1万人に近い集住が玄界灘沿岸地域ではあったと考えられる。したがって、先にあげたチャイルドの指標①を満たす弥生時代の居住空間の存在が推定できるのである。ただし、遺跡面積を200m² (1,000m²を5人で専有) で除すれば人口が産出できるわけではない。集住規模が大きくなればなるほど、それを維持するためのインフラが必要になるからである。そこで次に、このような集住が弥生時代の技術やシステムでどのように持続されていたかを考えてみたい。

2 集住維持に必要なインフラ(食料・水・燃料)

これまでの研究では、集住した人々がどのように安定的に食料を入手できたかという点に注意が払われてきた。一次産業従事者の比率や集落周辺の可耕地が狭いほど、集落外からの食料供給量は大きくなり、それを安定的に維持する仕組みが不可欠となるからだ。この点は、後述する分業の問題を論じるさいに議論したい。

食料以外にも、生活維持に不可欠なインフラとしての水と燃料の確保も重要である。現代の規定では、災害に備えて1人1日あたり3リットルの飲料水の確保が必要であるという。飲料水以外の日常生活にも水は不可欠だ。仮に1日5リットルを消費すると仮定すれば、1,000人の集落を維持するには1日5,000リットル、5トンの水が必要となる。人口の密集度が低ければ、河川水が飲料用に利用できたと予測できるが、高い人口密度になると尿尿等による汚染が危惧される。弥生時代中期になると、各地で井戸の構築が広がることは、集住を可能とした技術の登場と普及として大きな意味をもつ(宇野 1982; 堀 1999)。調理や暖をとるための燃料の確保も重要である。弥生時代の大規模集落は低湿地に位置することが多い。したがって、薪拾いや樹木伐採が可能な森林を確保、あるいは外部からの安定的な燃料供給を整備することも、大規模な集住維持のために不可欠な要素であったと推定できる。また、これらを議論するとき、弥生時代の大規模な遺構集中

をみせる集落で、多人数が通年的、通季節的に生活を営んだかという課題も残る。この点では、南関東の弥生時代集落を検討した浜田晋介の議論が参考になる(浜田 2011)。移住の頻度が多ければ、これらの問題は解決しやすい。

いずれにせよ食料に加えて水、燃料の安定供給が集住維持に不可欠な要因であることを、ここでは強調しておきたい。水資源獲得の技術として井戸の登場があるが、これ以外に安定的な浄水を維持し、広域で利用できるように技術やインフラの整備を弥生時代後期以降にはみいだしがたいのが現状である。浄水の維持に関していえば、集住が引き起こす大量の尿尿を含む生活排水の処理も大きな課題である。森勇一は、朝日遺跡の弥生時代中期の堆積物には中型のエンマコガネ属や小型のマグソコガネ属といった裸地的な表面を好む都市型の食糞性昆虫、食屍性ないし汚物性昆虫がみられることから、人糞や生ゴミなどをあさり、エサとする昆虫類が多数を占める環境であったことを指摘した(森 1992, 2012)。さらに、環濠や溝中には下水や汚濁水が流入する水域を好む珪藻類が多数みられ、また鞭虫や回虫などの寄生虫卵も認められると述べた。唐古・鍵遺跡でも花粉や珪藻分析などから、中期に環濠は流水がみられるが、後期には止水し、高い密度で寄生虫卵が検出されている(金原ほか 2004)。

このようなデータをみるかぎり、弥生時代の大型集落では浄水は主に井戸で獲得し、周囲に掘削した大溝へ排泄物やゴミを廃棄、それが一時的な増水で除去されることで、その環境が保たれるというサイクルによって衛生環境が維持されていたと推察できる。集落近辺の河川流水が維持されるかぎり、衛生環境は一定以上に保たれていたとみられるが、ひとたび気候が変動し、雨量や流路が変われば、衛生環境はたちまち悪化したとみられる。なお、当該期には家畜としてブタやニワトリの存在が指摘されているものの、その量は多く見積もることができないので、ユーラシア大陸の初期農業社会のように家畜と衛生環境の問題は生じてはいなかったと判断できる。

また、朝日遺跡や唐古・鍵遺跡では樹種同定や花粉分析を通して、コナラ節やクヌギ節を主体とする雑木林を人為的に作り出していた可能性が指摘されている(豆谷 2012; 樋上 2014)。人口集中地である大型集落では、外部依存以外にもさまざまな手段で燃料を含む木材資源を入手する方策がとられていたと判断できる。

これらの要素は自然環境の変化の影響を受けやすい。浄水や燃料の問題は集住の維持を阻害する要因であることを、ここでは強調しておきたい。

3 分業

1,000人規模の集住空間での生業分化については、出土品の種類や量から活発に議論されている。先にあげた唐古・鍵遺跡や池上曽根遺跡、朝日遺跡などの大規模集落からは、石器、木器、土器、玉、骨角器、青銅器生産、織布等の製作途中品や生産に使用された砥石や鋳型などが確認されており、農業や漁撈といった一次生産活動以外の生業が存在したことは明白である。

ただし、評価が大きく分かれるのは、これら多様な手工業生産や交易の担い手の存在形態である。ここでは3つの論点に整理しておこう。まず、i)フルタイムスペシャリスト(専業)だったのか、パートタイム(兼業)だったのかという点である。その製作技術がいかに高度であっても、それらが農閑期労働の産物であれば、かれらは通時的に食料を他者に依存する必要はない。次に、ii)専業工人が存在していた場合の全体人口に占める比率が課題となる。専門性が高くニーズが少ない場合は、必要に応じて各集落を巡回するような非定住的な巡回工人(集団)ではないかという議論があるからだ。先に指摘したようにウェーバー的な基準で都市を論じる場合には二・三次産業従事者の比率が多くある必要があり、一方でチャイルド的な基準で論じるさいには、この比率はほとんど問題にはならない。最後に、iii)工人集団と権力の関係である。これは工人集団が自然的にニーズの大きい大規模集落に定着したのか、あるいは権力が工人を招集、あるいは集住を強制したのかという点である。こちらは都市の認定基準というよりも、都市形成に対する権力の関与度をめぐる議論と密接に結びつく。

もっとも評価が分かれるi)の議論を整理しておこう。弥生都市論を展開した広瀬和雄は、池上曽根遺跡などの大型環濠集落を例にあげ、そこでの「多彩な職掌の共生」を論じつつも、漁撈や狩猟活動が「分化独立して営まれていたかどうかは断定の限りではない。おなじことは農耕と手工業生産の関係についてもいえることだが、「農工分離」があったのか、なかったのか、いずれも今後の検討課題である」とし、「技術工程や専業度の高低、原料の供給や製品の流通といった問題の解明はこれからの調査研究に期待したい」と述べる

にとどまる(広瀬 1998: 43-44)。非農業従事者や専業工人の存在、その人口比率については言及しないのである。

広瀬が農民集落とする小規模集落と弥生都市とする大型集落での生産の質的区分に対しては、私を含む幾人かの研究者による批判的検討がある。例えば、広瀬は池上曽根遺跡の都市性を論じるなかで、多数の石庖丁製作途中品が出土することを根拠に、交換財として石庖丁が生産されたと論じているが(広瀬 1998: 43)、秋山浩三や仲原知之の研究(秋山・仲原 1998)を参考に、私は製品と製作途中品の比率を示し(寺前 2001, 2006)、池上曽根遺跡と周辺集落においてその比率に差がないことを指摘した。池上曽根遺跡と周辺集落の石庖丁製作途中品の出土量の差は集落規模に比例した生産規模の差であり、両者に分業システムは成立しないのである。

これらの批判を受けてか、その後は広瀬が弥生都市論のなかで近畿地方の石庖丁生産をとりあげることはなく、「特定の製品を集中的に大量生産する「専業工房」で、福岡県今山遺跡の太形蛤刃石斧、福岡県立岩遺跡の石庖丁、福岡県須玖遺跡群の青銅器・ガラス製品の鋳造や鉄鍛冶、京都府奈良岡遺跡の水晶玉や碧玉製品の鋳造や鉄鍛冶、京都府奈良岡遺跡の水晶玉や碧玉製品の鋳造などがみつまっている」と述べるにとどまる。さらに農閑期にごく限られた製品を生産していた程度の農民集落と、多種多彩な手工業生産が実施されていた弥生都市、そしてこのような「専業工房」の3類型の分業生産が弥生時代にはあったと論じ(広瀬 2003: 21-23)、「専業工房」の存在を弥生都市の指標から外す。ここで広瀬があげる「専業工房」がある遺跡のうち、都市論の対象となりうるのは須玖遺跡群のみであり、他の多くは原材産出地に近い生産遺跡だからであろう。このように広瀬の論では、ウェーバー的な都市の定義、非農民層である専業工人が居住する場としての都市像は巧みに回避されている。

また、乾や広瀬らを取り上げた手工業生産に関わる考古学的事実のほとんどは、弥生都市論が活発に議論される1990年代後半以前に広く知られている考古学的事実であり、都市と解釈する論者は、その評価のみを変化させたというのが実態である。では、その変化を促した考古学的発見は何か。それは1990年代に相次いだ池上曽根遺跡や唐古・鍵遺跡、滋賀県守山市伊勢遺跡などにおける大型建物の検出であると、私はみる。各地の弥生集落で宗教的モニュメントとも評価される大型建物の評価については、後述する。

4 交易と都市性

弥生時代の分業に対する評価は難しい一方で、日本列島外を含む長距離交易、あるいはコメを中心とする農作物の交換は、弥生時代における都市性の源泉として、近年注目を集めている。

弥生時代における交易と都市性の関係性については、大久保徹也の議論が参考になる（大久保 2003: 37）。大久保は、広瀬による弥生都市の本質は集落を多彩な物財を取り揃えた交易場とみなすことにあったとした。ただし、広瀬とは異なり、大久保はその物資集約に権力は一義的に介在せずともよく、各種資源を一箇所に大量に集積し、必要な物資を最も効率的に獲得する機会を提供する手段として市としての「都市」が要望されたと理解した。この点を深化させたのが、近年の北條芳隆による議論である（北條 2021）。北條は、古代中国の様相を基準とする中村慎一による面積100ha、人口5,000人以上という都市の定義を参照にしつつ（中村 2008）、市場交換の場としての都市論を展開した。

なお、北條の議論の前提となったのが、すでにいくどか言及した福岡平野を中心とする集落研究の深化である。吉留秀敏らによって福岡市比恵那珂遺跡群は130ha、春日市須玖岡本遺跡群は100haとされ、前者では弥生時代中期後半以降、南北1.5kmにわたる直線道路が敷設されていた可能性が指摘されている（吉留 1999；久住 2008）。さらに比恵・那珂遺跡群は朝鮮半島との交易拠点として機能したことが、土器の搬入・搬出状況と稀少財の分布から解明されている（白井 2001；久住 2007）。

したがって、先に紹介した藤本の展望（藤本 2007）とは異なり、弥生時代には交易という経済活動を軸とした都市空間の形成が議論されつつある。北條はこの状況をふまえ、「都市的な様相」といった控え目な表現も妥当ではない。素直に弥生時代の都市を認め」るべきだと断ずる（北條 2021: 88）。私も、大久保や北條の提言をふまえ、少なくとも弥生時代中期の玄界灘沿岸地域では局地的ながら、西アジアや古代中国の初期都市と比べても、遜色のない都市が交易を軸として形成されていたと理解する（大久保 2003；北條 2019, 2021）。

5 纏向都市論と古墳時代における都市の消滅

しかし、これらの弥生時代の都市は、その後の古墳時代において継続的に発達することはない。この非継

続性について北條は「古墳時代になると纏向遺跡を最後に都市景観は日本列島から消滅した。しかし都市の機能は失われず古墳造営ポトラッチの舞台へと引き継がれ、分散的で競覇的な再分配と国内市場交換の場が随所に繰り返された」とみている。造営期間限定の都市的キャンプなので存続期間は短かったはずで、遺跡として見出しにくいから、考古学はまだ実態を把握できないでいる」とする（北條 2021: 98）。都市的景観と都市の市的機能を区分して考える重要な指摘である。

北條が指摘するように、古墳時代において全長数百m、高さ数十mに達する巨大な墳墓モニュメントが多数築造されるという考古学的事実は、この造営のために労働力と物資が集約されていたという事実を示す。これについては、寺沢薫が展開する奈良県桜井市の纏向遺跡を都市と規定する議論（寺沢 1984, 1998a, 1998b）と、これを批判的に検証した酒井龍一の議論が参考になる（酒井 1999）。

寺沢は奈良盆地東側の巻向山を起点とする扇状地に広がる遺跡群を検討し、太田北、太田、箸中の3集落を狭義の纏向遺跡とまとめて、その面積が約100haにおよぶという1)面積の広大さ、が「定住による大聚落」という都市の前提条件を満たしており、2)前段階まで過疎地帯であった当地に周辺的大型古墳の消長に軌を一にして形成されることを根拠に、その発生が人為的＝政治的であると評価する。また3)搬入土器の多さとその搬出地の広がり、4)交通の要所、という性格から大規模な市的機能を想定する。さらに5)大型古墳の存在、6)豊富な祭祀遺物、7)真北方向に企画され、柵がめぐる特殊な掘立柱建物の存在をもって、政治的かつ祭祀的色彩の強い空間であると論じた（寺沢 1998b: 32）。このような理解に基づき、寺沢は纏向遺跡が都宮であり、政祭一致の原理を掌る場、そして交通の要衝として市的機能をも内包する遺跡であると論じたのである。また、理論的にはマルクスのアジア的都市、あるいはウェーバーのいう国家官庁の所在地としての君侯の要塞に相当するとした（寺沢 2011）。纏向遺跡にみられる3)や4)の属性から、市的機能を有する都市と解釈する寺沢の理解と、先にあげた大久保の議論は、権力の評価を除けば親和性が高い。

一方、酒井龍一は纏向遺跡を古墳造営キャンプと捉える。寺沢があげた以上の根拠に対しては、1)北部九州には同等の面積の遺跡があることから、決定的要素にならない、2)5)6)は古墳造営キャンプとして理解するのに有利な状況、7)については、弥生時代

の建物と比べ小規模で構造が貧弱であるとする（酒井 1999: 44-45）。なお、1）について本稿ではすでに述べたように北部九州のそれらを都市と考えている。

寺沢が1980年代に提唱したこの纏向都市論は、考古資料的には圧倒的な規模の墳丘墓や古墳群の存在という考古学的事実を前提とし、そこに特殊な儀礼具、搬入土器や土木具（鋤）の多さという遺物論や、運河としての大溝や掘立柱建物が加わるという演繹的な評価でもあった。しかし、2009年からはじまる纏向遺跡トリイノ前地区における「大型建物群」の検出によって（桜井市教育委員会 2013）、先に紹介した7）の属性が加わることとなる。本地点において、3世紀前半に属する一直線に復元できる3棟の建物が検出されたのである。建物群は柵列に囲繞されると報告されている。建物群のうち西側の建物Bは東西2間（約4.8m）×南北3間（約5.2m）、中央の建物Cは東西1間（約5.2m）で棟持柱を有し、南北3間（約8m）の建物、東側の建物Dは、南北4間（約19.2m）、東西2間（6.2m）という同時期では最大規模の建物が想定されている。

ただし、以上の評価は速報的にまとめられた概報段階の解釈である。この復元案に対しては小澤毅や関川尚功の批判があり²、柵列に囲まれた大型建物群の存在を根拠に纏向遺跡の卓越性を主張すること、あるいは都市の要素と評価することには、筆者も慎重でありたい。米川仁一も纏向遺跡群において集住を示す住居や居住域の確認が少ない点に注意をうながしている（米川 2003）。

したがって、墳長280m、高さ30mの箸墓古墳をはじめとする巨大古墳の造営と纏向遺跡の形成が連動するという事実がもっとも重要となる。北條芳隆の試算によれば、農閑期労働ではなく専従の労働者たちが従事していたとして、箸墓古墳の造営には年間250日／500人で工期は7.9年になり、年間2,491石の米を支給する必要がある（北條 2019: 335）。古墳造営にあたり、労働の担い手が各地から集結し、かれらや各種技術者

の生活に必要な物資供給体制が整えられ、古墳での葬礼に関連する所作がこの地で反復して実行されていたことを疑う余地はない。したがって、纏向遺跡をa：都宮、b：政祭一致の儀礼空間、c：市的機能、の3つを有する都市だとする寺沢の見解のうち、巨大な政祭モニュメントである箸墓古墳の造営（b）という大規模土木事業を達成するために、労働者の集住を支える市的機能（c）がその前後の期間において極度に充実した「にすぎない」という酒井の理解はこれらの点にかぎれば一致する。また、外部依存性を重視する北條の視点と寺沢・酒井の重視する市的機能は整合的である。

さらに実際の発掘調査面積は少ないのが難点であるが、先に紹介した比恵那珂遺跡群や須玖岡本遺跡群に匹敵する面積が想定されている点も、纏向遺跡群という空間を都市と評価する積極的根拠であるといえよう。むしろ、議論が必要なのは奈良盆地東南部で大型古墳築造が継続する時期にもかかわらず、この纏向遺跡群という空間が古墳時代前期の早い段階で遺構密度を極端に低下させるという事実である。

この背景について、本稿では古墳時代における都市的集住の解体と都市的要素の「分散」を儀礼を介した社会結合の創出という視点からの説明をめざす。

IV 都市なき権力構造を可能とした都市的機能分立型古墳時代政治システム

1 モニュメント・宗教施設の構築を契機とする都市形成

チャイルドの都市論を整理するなかで、④記念碑的公共建造物の登場が社会的富集約の対象として重要であることを指摘した。都市をめぐる議論のなかでモニュメント・宗教施設の重要性はさまざまな地域や論者によって指摘されている。

クーランジュ・ド・フェステルはその著書『古代都市』のなかで、都市（キヴィレス）と都会（ウルプス）

² 小澤毅は建物群の軸線方位が東で北へ4～5度とふれがあり、建物配置も完全な対称性を保つわけではないこと、大型建物Dとされる遺構の半分は推定であり、主柱直径は30cmと細く、柱を埋めるために掘られた堀方が浅く小さいこと、周囲の小柱穴の残存状況から大きな削平の影響は考えられず、柱の根入れは浅かったことは明白である点をあげ、概要報告書（桜井市教育委員会 2013）が復元するような大規模な高床建物は想定しづらいとする（小澤 2018: 40）。また、奈良盆地で調査を重ねてきた関川尚功も、建物Dについては主柱の半数以上が失われていることや、建物群後に複数の建物が頻繁に建てられていること、柵列とされる柱痕が不揃いであることから、王宮クラスの遺構とすることには慎重な姿勢をみせる（関川 2020: 53）。ちなみに弥生時代中期に属する池上曽根遺跡の大形建物1は10間（約19.3m）×1間（約7.5m）と建物Dの推定規模に近いが、柱径は50～60cmが大半を占め、同規模と想定されている纏向遺跡の建物Dよりも、はるかに太い。なお、柱の根入れが浅いことを受けて、概要報告書では建物下に厚さ50cmの基壇状盛土を想定しているが（桜井市教育委員会 2013: 22）、具体的な類例に乏しい。いずれにせよ、今後の検討が必要である。

を区分している（クーランジュ 1864）。すなわち、都市は家族や部族の宗教的・政治的団体であり、「都会」はこの団体の集会の場所、住所であり、その聖所でもあるという。本稿でいう都市は彼のいう「都会（ウルブス）」に相当する。そして、ローマにおける都会（ウルブス）の成立は厳密な宗教的儀礼を経て定められるとした。彼は古代ローマにおける都会（ウルブス）が建設者の姓名と建設日時を有している点を強調し、「都会は神聖な囲牆にかこまれ、祭壇を中心としてひろがるものであるから、都市の神々と人々とを包含する宗教的な住所であった」「都会はひとたび儀式にのっとって建設されれば、その囲牆のなかに守護神を勧請し、神々はまるでその土地に根をおろしたかのように、うごかすことのできないものとなるのである。都会はみな聖殿で、聖都とすらよぶことができた」と述べる（クーランジュ 1864 (1961): 204-205）。

クーランジュの議論からは、古代ローマにも聖殿という一種のモニュメント建設と儀礼空間創出を契機とした都市（ウルブス）の形成が展望されていたこと、むしろ聖殿こそが都市創出の始まりであるという「神話」的言説が重視されていたことを知ることができる。古代ローマの都市に対するクーランジュの理解と先のチャイルドの④の視点、社会的余剰の少ない段階での公共施設の登場がその「投資」先と、その動機となるという理解とはきわめて親縁性が高い。

古代中国においても、宗廟という公共建造物が財や技術を集約させ、効果的な運用を可能とする「空間」形成の契機となったことが指摘されている。金関恕は中国文化圏における「都市」概念の起源を論じるなかで、『春秋左伝』莊公28年の条に「邑のうちでも、先祖のための宗廟があり、先君の主（位牌）を祭っているところが都である。邑を設けることを築く^{きずく}というが、都の場合は城^{きずく}という」とある点を紹介し、宗教的結合の中核である宗廟の所在が「都」の基準であるとした（金関 1998: 66）。また、中国初期王朝時代における中心性の発現過程を論じた角道亮介は、殷墟遺跡の甲骨文字の分析や青銅容器に鑄込まれた祖先名^{ミコトノナ}の存在から、頻繁な祖霊祭祀の実行を読み取った上で、西周王朝はこの殷墟文化期の特徴を継承し、祖先祭祀の政治化を実現することを通して、中心性の枠組を生み出したとする（角道 2021）。いずれの論でも古代中国では宗廟という血縁的結合が具現化された空間、あるいは

はそこで反復される祖先祭祀が「都」の中心性の源泉となったことが強調されている。つまり、チャイルドが言及することがなかった古代中国でも、宗廟という公共建造物が、財や技術を集約させ、効果的な運用を可能とした「引き金」となっていることを教えてくれる。あるいは、藤本が政治的と規定した東アジアの都城原理の実態として、祖先祭祀を軸とする儀礼センターの存在を読み取ることができるかもしれない。

南米アンデス形成期、ペルー北部海岸から山岳地域にみられる「神殿更新」も重要である（関 1998）。農耕が十分に発達していない段階で神殿の構築が開始されたこと、それをより巨大な神殿に立て替えていくために食料の余剰が必要となった結果、食料が増産され、人口が増加し、政治システムが発展していった社会が約1500年間続いたと指摘されている。

つまり、公共施設の建設が人と財が継続的に集まる空間形成の契機となっているという理解が、西アジア、古代ローマ、古代中国、そして形成期のアンデスの研究においてみられるのである。本稿では、これらの指摘をふまえて日本列島でも都市的空間を生み出す要因の一つとして、市形成や集住を引き起こす公共施設・モニュメント建設に注目する。

では、日本列島における古墳は、その造営のための一時的集住が契機となり、その後は継続的人口集中や都市機能の拡大再生産の場となったと評価できるだろうか。答えは否である。なぜなら、古墳空間での長期的、連続的な儀礼の継続は認められないからである（東藤 2020；加藤 2021: 251）。古墳というモニュメント造営は寺沢らが指摘しているように市的機能や一時的集住を引き起こしたという点で都市的機能を生み出すが、その空間自体が都市には成長しないのが、日本列島の古墳時代の特徴なのである。

次に文献史学の成果にも目を広げ、古墳時代の王宮や「社」といった施設の社会的機能を検討する。結論を急げば、小規模で短期存続する王宮が政治拠点として機能し、祭祀施設である「社」には専門工人の定住を前提とする高度な技術の集積と財の継承が実施されたと想定している。これらの社会的機能が分化したことが、チャイルドをはじめとする都市論の前提となる①集住を欠いたままでの古墳時代の権力形成とその維持を可能にしたと、私は考えている。以下、その根拠を説明していこう。

2 古墳時代の王宮とその機能

7世紀末の藤原京³以前には、大王の代が変わると同時に宮が移動すると理解されてきた。記紀上で「宮」は大王（天皇）一代ごとに1つとされ、一代のうちに何度も宮を代えた大王もみられる。ただし、仁藤敦史は、単純に新築と放棄を繰り返していたわけではなく、治世ごとに宮号を改めながらも、宮空間自体は存続することが一般的であったのではないかと推定している（仁藤 2011: 12）。例として、厩戸王子から山城大兄王、あるいは武市皇子から長屋王といった父子間で引きつがれた斑鳩宮や香具山宮をあげる。古市晃も記紀の「宮名」は7世紀後半にまとめられたものなので、その名称が異なることを根拠に、場所が異なる根拠にならないと主張する（古市 2021）。

宮の存在を検証できる文字資料としては、古墳時代中期末（5世紀後葉）に属する埼玉県行田市の埼玉稻荷山古墳に副葬されていた鉄剣の銘文があげられる。鉄剣表裏には115字が金錯眼されており、「獲加多支鹵大王寺在斯鬼宮時」という一文がみられ、ここから「大王」という人格が「宮」に所在するという認識が5世紀後葉にはあったことが読み取れる。また、和歌山県橋本市隅田八幡神社所蔵の人物画像鏡内区外縁にみられる48文字の銘文も重要である。この鏡銘文にも「孚弟王在意柴沙加宮時」という一文がみられる。銘文の解釈は研究者によって異なるが、癸未年を503年とみる理解が有力であり、6世紀初頭にも「大王」のほかに「王」という称号あるいは尊称をもつ人物の所在地も「宮」と認識されていた可能性を読み取ることができる。

このような王の所在する宮、王宮が考古学的に確認された事例は少ないが、有力候補としてあげられているのは奈良県桜井市の脇本遺跡である（磯城・磐余の諸宮調査会 2019）。5世紀後半、6世紀後半、7世紀後半に属する大型建物群が検出されている。脇本遺跡は奈良盆地南東部に位置し、外鎌山と三輪山に囲まれた初瀬谷に位置する。遺跡は『記紀』に登場する雄略の泊瀬朝倉宮や欽明の行宮である泊瀬柴垣宮の伝承地に近いことから、その候補地とされてきた。ただし、

谷の幅は400m前後と狭い。奈良盆地と東国を結ぶ要所に位置するとも評価できるが、大規模な集住は望めない立地である。古市は、5世紀に権勢を誇った葛城氏の拠点と評価される奈良県御所市の南郷遺跡群（坂・青柳 2011）が葛城山系東麓の斜面地に立地することをあわせて、狭隘な立地、急峻な立地を選択する城塞的な王宮の姿を想定している（古市 2021: 30, 60）。

『宋書』をはじめとする中国史書の記述から、当該期に強力な権力を有する王権が存在したことは明らかである。この王権を構成した諸勢力は、仁藤が想定したように（仁藤 2011: 34）、6世紀までは大和を中心に磐余や飛鳥、石上、長谷など複数の拠点をもっていたとすることが妥当であろう。ただし、奈良盆地や大阪平野では、広域で発掘調査が実施されてきたが、遺構が集中する大型建物群や施設の具体的な検出例は乏しい。また、先の脇本遺跡も含めて、同じ場所で大型建物が連続的に建て替えられ、継続していた様相をみいだすことはできない。したがって、仁藤や古市が想定するような継続的な政治拠点の抽出は考古学的に困難である。複数の小規模な政治拠点が営まれ、大王や王は代ごとあるいは立場ごとに複数の拠点を次々と構築し、同じ場所に回帰することもあったと考えられる。少なくとも、都市的な大規模集住を伴う拠点が継続的に営むことはなかったと考えられる。したがって、古墳造営の拠点と同様、当該期の王宮も継続性に乏しいことになる。では、当該期において空間的に長期的に利用され続けた拠点はなかったのだろうか。次にその候補として、祭祀遺跡と神をまつる宗教施設を取り上げたい。

3 古墳時代における祭祀施設の機能

日本列島において祭祀遺跡に関する研究は盛んである一方で、神殿や「神社」をめぐる考古学的議論はきわめて低調である。その要因は文字情報に欠くために多数の遺構のなかから「それ」を抽出することが困難であるという点につきる。

文献にみられる初期の宗教施設との齟齬も課題だ。

³ もちろん、藤原京は都市として突発的に形成されたのではない。飛鳥における斉明朝（655-661年）の須弥山や苑池の造営による新たな中国文明的な饗宴空間の創出や、漏刻台の設置による時間の支配、飛鳥池遺跡にみられる富本銭の鋳造をはじめとする工房空間の存在は、飛鳥地域に都市的諸要素が集約していた証左である。条坊制がない点、有力氏族や皇子の居住空間が排除される点、飛鳥寺といった宗教施設が「宮」域に配置されている点を除けば、「飛鳥京」の段階で都市的要素はそろっている。「藤原京はある意味で「飛鳥京」に条坊制の枠組みをかぶせることによって成立した」と評価できることを重視し、林部均のように日本列島における都市の成立を天武期（673-686年）の「飛鳥京」に求める見解もある（林部 2003: 66, 69）。

広瀬和雄は一連の都市論のなかで、大阪府池上曾根遺跡で検出された長辺約19.3m、短辺7.5mの大型独立棟持柱建物をカミが常駐しない神殿と解釈した（広瀬 1996, 1998）。その後、設楽博己も独立棟持柱建物と祖霊との関係で論じている（設楽 2009）。ただし、この種の建物を神殿とする考古学的見解には異論がある。例えば、岡田精司は人里離れた清浄な屋外に自然物を祭る祭場が、神社の古式のありかたであるという理解を前提に、住居が密集する集落内に建築された大型建物がカミを祭る場とは考えられないとした（岡田 1998）。弥生時代にみられる「神殿的」な大型建物が、次の古墳時代にはほとんど認められない点も、岡田らの批判に説得力を与える。

なお、神社という名称は『日本書紀』天武紀13（西暦684）年の大地震の記事中に初めて登場する。それ以前の神を鎮める場所は「宮」「社」あるいは「祠」と記載されている。そこで、本稿では後の神社に相当するカミをまつる施設をヤシロと呼称し、議論を進める。

初期のヤシロを考える上で興味深いのは、笹生衛によって進められている神籬論である（笹生 2015）。笹生は、これまで榊を意味するとされてきた『日本書紀』や『古語拾遺』にみられる「神籬」を、9世紀初頭に編纂された『皇太神宮儀式帳』の祭式や古墳時代における祭祀遺跡出土品との比較を通して、外界から祭祀空間を遮蔽する堀や垣を意味すると論じた。また、神籬を示す考古資料として古墳時代前期に属する奈良県御所市の秋津遺跡や中期に属する神戸市松野遺跡にみられる建物群を圍繞する堀や、堀を表現した圀形埴輪をあげる。本稿では、笹生の卓見をふまえ、「神威」を隔離するための神籬が古墳時代に成立したという視点で、ヤシロという儀礼空間と神威を有する器物の所在地が、権力者の政治を実施した王宮から分離していく過程を文献をもとに論じたい。

『日本書紀』崇神紀では、天照大神と倭大国魂の二神が神籬に隔離されていく過程が詳細に記されている。まず、崇神5年条に疫病が流行し（多疫）、多数

の死者がでたことが述べられ、6年条にもその混乱が継続したとされる。このような事象の真偽やいつの出来事を述べているかを判断することは難しいが、近年の崇神を実存する最初の大王とする古代史の理解と考古資料の分析に基づき、ここでは3世紀末から4世紀前葉の歴史的事実を反映しているとみたい⁴。それまで「天皇」は二神と「同床共殿」していたが、天照大神の神威が強すぎるため、別の場所、倭笠縫邑に磯堅城の神籬を立てて、豊鋤入姫命に託したことが述べられている。これが次の垂仁段階に伊勢に鎮座することになるのが、日本書紀の述べる伊勢神宮のはじまりである。また、夢での神託と占いを受けて、大物主大国、大国魂神、そして他の八十万の群神を祀ることで、はじめて疫病が収まったという。これも王宮や豪族の宅とは別にヤシロを建てたという脈絡で理解できよう。

もちろん、これら崇神紀の記載内容は時期的、あるいは空間的な展開の是非や潤色の度合いについての慎重な検証が必要である。ここでは政治的拠点である王宮から、皇祖神である天照大神の祭祀空間が分離され、別所に設置するという伝承が王権形成期の事象として登場し、その契機に疫病の流行があること、そしてこの葬祭の分離によって、疫病がおさまったという神話的「物語」が共有されている点に注目しておきたい。

4 文献資料と伝世資料からみる石上神宮の機能

では、あらたに分離した祭祀空間はどのような社会的機能を有していたのだろうか。ここでは奈良県天理市に今も所在する石上神宮と近接する布留遺跡のありかたから、この点を論じてみたい。

石上神宮は『延喜式』神名帳では「石上坐布都御魂神社」とあり、祭神は布都御魂大神と布都斯魂大神である。このうち、布都斯魂大神は、素戔嗚尊が八岐大蛇を退治したさいに用いた天十握剣で「蛇之龜正」とも呼ばれている。また、『日本書紀』垂仁紀39年条には、崇神の後を継いだ垂仁「天皇」の皇子、五十瓊敷入彦命が剣一千口を造らせ、これらを石上神宮に収めたことが述べられている。先述の崇神紀の事

4 5世紀以前の記紀が示す事績の実年代を特定することは、対比する中国史書や金石文に欠くために困難を伴う。新井白石をはじめとする先学の取り組みについては、栗原薫の研究に詳しい（栗原 1991）。なお、栗原は半年を1年とし、通常の干支紀年としての辛酉の前半年を辛酉、後半に壬戌を送ることで崇神崩年は『古事記』戊寅をとり西暦279年とする。一方、笠井俊人は有記事年次の総和を治世年数と仮定したうえで、崇神崩年を西暦312年とした（笠井 1953）。崇神は欠史八代の後に即位した天皇であり、実在していた可能性の高い「天皇」であるとされている（吉村 1998）。また、崇神天皇陵に比定されている行燈山古墳（前方後円墳：242m、奈良県天理市）は、円筒埴輪の型式編年によってI期新相に位置づけられている（廣瀬 2015: 60）。I期新相の埴輪を有する古墳としては奈良県新山古墳などがあり、副葬品などをふまえると大賀克彦による編年の前V期（大賀 2002）、岩本崇による編年の前期古墳編年IV期に相当する（岩本 2018, 2020）。実年代的には3世紀末から4世紀前葉に位置づけられる。

績を3世紀末から4世紀前葉とすれば、4世紀前半から中葉に位置づけられよう。さらに彼がこの神宝をつかさどることとなり、87年条には妹の大中姫にこの役を譲り、さらに大中姫は物部十千根大連ものべのとちぬのおおむらじに授けて、これを治めさせたと述べる。なお、平林章仁は『先代旧事本紀』天孫本紀に崇神「天皇」が伊香色雄命いかがしこのおのみことに「天社、国社を定む」ことを命じたことに続いて、「布都大神社を大倭国山辺郡石上邑に遷し建つ」とあることを指摘している（平林 2019: 228）。この記載を重視すれば、4世紀初頭前後の事象を反映した可能性のある崇神紀にみられる笠縫邑に設置された磯堅城への天照大神の「隔離」と同時期に、石上にも布都を祀る施設が移されたと読み取れる。

石上神宮はその所蔵品から考古学的にも関心を集めてきた。とくに、剣身の左右にそれぞれ3本の枝刃をもつ全長74.8cmの鉄剣の存在は重要である。この剣身には金象眼で60あまりの文字が記されており、その文字冒頭の「泰□四年」が、東晋の年号「太和」とすれば西暦369年の製作となる。古墳時代前期末に相当する。この形状と銘文内容から、この特異な鉄剣が『日本書紀』神功皇后紀52年条に登場する百済王から倭へ献じられた七支刀に相当するとする解釈が有力である。4世紀後半に定点を定めることができる。このほかにも古墳時代中期中葉に導入される鋳留で鉄坂を重ね合わせて接合した高さ1.5mの鉄盾2枚も所蔵されているが、これを『日本書紀』仁徳紀12年にみられる高麗国が献じた鉄盾に該当させる意見もある。

これらを含む石上神宮が所蔵する武器・武具の由来や行方を知る上で、興味深いエピソードが、『日本書紀』天武3（西暦674）年に記されている。それは、天武が忍壁皇子を石上神宮に遣わして、膏油をもって神宝を磨かせ、神府に貯蔵ほくらされていた「諸家の宝物」を、すべてその子孫に返却することを命じたという記載である。石上神宮の神府の器物のなかには地方首長の宝物があるという認識と由来に関する具体的な記録を、7世紀段階の王権は有していたのである。さらに後の延暦24（西暦805）年には石上神宮の武器を山城国に移そうとした際には15万7千人余の人手を要したことが『日本後紀』に記されている。平安時代に至っても大量の武器類が石上神宮の神府に所蔵されていたことは間違いない。

5 循環する財がつなぐ古墳時代の社会関係

これまでの古墳研究では、副葬品として検出される

銅鏡や刀剣といった財は王権から地域権力へ「授与」や「下賜」され、副葬されたとする理解が一般的であった。これは王権中枢を構成するとされる近畿地方中部の大古墳に、種々の副葬品が量的に集中し、質的にも卓越するという考古学的事実に基づく。ただし、これについては文献を研究する立場からの異論が古くからある。横田健一は王権や地域の「豪族」が所持する鏡や武器などの財を収奪する場面が記紀に再三登場することを根拠に、小林行雄が主張した王権から地方豪族への鏡の授与（小林 1955ほか）に否定的であった（横田 1985）。考古学でも、近年は王権側が地域の所有する財や儀礼スタイルを吸収し、拡散させるという機能を有していることが指摘されており、中国鏡の入手から副葬に至る過程についても複数の所有を介する器物の動きが想定されている（下垣 2011, 2018；上野 2018）。

私も豊島直博らの型式学的分析を参考に（豊島 2010）、弥生時代では北部九州や関東で剣として用いられる型式の鉄器が古墳時代になるとヤリに転用され、近畿地方中部の古墳に多数副葬されるという事実を指摘した（寺前 2021: 141）。さらに古墳時代前期に属する奈良県桜井市メスリ山古墳副櫛にみられる212本の多様なヤリの存在に基づき、次のような想定をしたことがある。それは地域ごとに入手、所有されていた剣が一旦中央に集められ、ヤリに転用された後に地方へ「配布」され、さらに王権中枢の葬礼の際に地域首長がこれを持ち寄り、最終的には近畿地方中部の大古墳であるメスリ山古墳に集約して副葬されたという器物の循環的な交換の蓄積の存在である（寺前 2021: 151）。

日本列島内で作成された同時代史料に欠く古墳時代の考古学的研究は、情報量が多い埋葬施設出土器物やそのセットから政治や社会関係が論じられる傾向が強い。しかし、古墳に副葬された鉄ヤリから復元できる複雑な来歴からは、王権から地域首長という一方向的で単発的な「贈与」だけでなく、地域首長から王権、あるいは地域首長間の「収奪」を含む、双方向で連続的な「贈与」の繰り返しを想定すべきではないかと、私は考える（図2）。このような循環的なモデルは、かつての横田の主張とも小林の想定とも整合的である。また、三好玄はG・ファインマン、R・ブラントンによるデュアルプロセス理論（Blantonほか 1996）を援用し（三好 2013, 2014）、大型前方後円墳の形成と遺跡間の機能分化をネットワーク型戦略に基づくポ

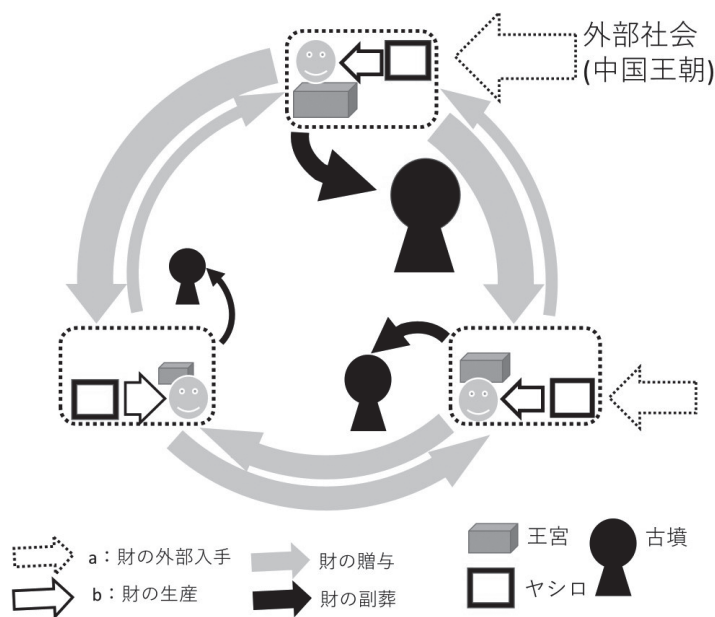


図2 古墳時代における財の循環

リティカル・エコノミーの最たるものと評価している（三好 2013: 17）。三好の整理をふまれば、図2で示した財の循環は古墳時代におけるポリティカル・エコノミーの実態であると評価できる。つまり、古墳築造だけではなく、贈与行為を繰り返すことによって、財を双方向的に循環させることとそれをおしみなく副葬品として消費することが重視された社会として、古墳時代のそれを定義できる（石村 2004）。

このような定義が許されるならば、古墳に副葬される豊富な財は次のように解釈できる。まず、稀少な財は日本列島外から入手（a：財の外部入手）、あるいは相応の技術で稀少な素材を使って製作（b：財の生産）され、それらは贈与（図2 灰色矢印）の後に積極的に副葬（図2 黒色矢印）される。稀少財の積極的な副葬という特異な消費行為が、贈与の循環から稀少財を随時退場させていき、交換される量を一定に保つ。結果として財の陳腐化やインフレを未然に防ぎ（河野 1998）、入手の必要性を継続させたのである。

贈与交換では互酬による均等が保たれるかぎり、あやういながらも長期的には対等性は保持されるが、図2にあげたように特定の主体が他にない器物を遠方から入手（a：財の外部入手）あるいは生産（b：財の生産）した場合、送り手は受け手に対して優位にたつ。つまり、a：中国王朝や朝鮮半島諸勢力といった外部社会との交渉において稀少な遠方の器物の入手、b：高度な技術や創造性を駆使して他にない器物を生産することによって、他者の入手しえない器物を贈与できた主体は、不均等な贈与を重ねることができる。その

行為を通じて中国王朝を後ろ盾とした勢力は、やがて王権と呼ぶべき優位性を古墳時代において確立したと理解できるのである。

6 石上・布留遺跡における生産拠点

a としての列島外器物の入手は、中国大陆の華北系工人が製作した三角縁神獣鏡をめぐる議論が理解しやすい。b の事例としては日本列島製の精緻な大型鏡や倭独自の装具がとりつけられた鉄製武器類、山陰や北陸産の碧玉等をもちいた腕輪形石製品があげられる。後者の場合は、鉄や玉、南海産貝といった遠方の素材を獲得することが重要になるため、a 的な要素も含まれる。

そして、b の生産が実施された空間の具体例として、石上神宮の眼下に広がる奈良県天理市布留遺跡があげられる（図3）。布留遺跡は、大和高原に源を発する大和川水系の布留川が盆地へ流れ出す谷口付近に形成された北岸の扇状地（堂垣内地区ほか）と南側の河岸段丘上（杣之内地区ほか）に展開する旧石器時代から近世にいたる複合遺跡である（日野 2019）。扇状地の起点となる上流南台地上に石上神宮が鎮座し、下流北岸からは石敷遺構に滑石製模造品や土器類のほか、鉄器工房の存在を示唆する鉄滓や玉作りに伴う玉破片が出土している。古墳時代中期前半の高杯や埴輪の集中、ミニチュア鉄製品、滑石製模造品が伴う儀礼空間も流路近傍より検出されている。同様の儀礼空間は南岸でも確認されており、生産空間と儀礼空間が共存するのが当遺跡の特徴である。

遺跡全体の動向を整理した中久保辰夫によれば、布留遺跡は弥生時代後期末以降の近畿地方では数少ない高所に展開していく集落であること、それまでの拠点集落が列島の衰退していく古墳時代前期後半（布留1式(新)～2式）において例外的に継続するという特徴があげられている（中久保 2020: 107-109）。さらに古墳時代中期には未製品を含む多数の木製刀剣装具や韃羽口、鉄滓が検出されており、稀少な刀剣類がこの地で生産されていたとみられる。鍛冶関連遺物は、前期に遡る可能性も指摘されている（中久保 2020: 109）。また、当該期には5間×3間の総柱建物2棟（9×6m、9×6.6m）が、幅15m、深さ2mの大溝の近傍に設置されていた。大溝は布留川から引水することを目的とした人工水路であり、水運に利用された可能性もある。

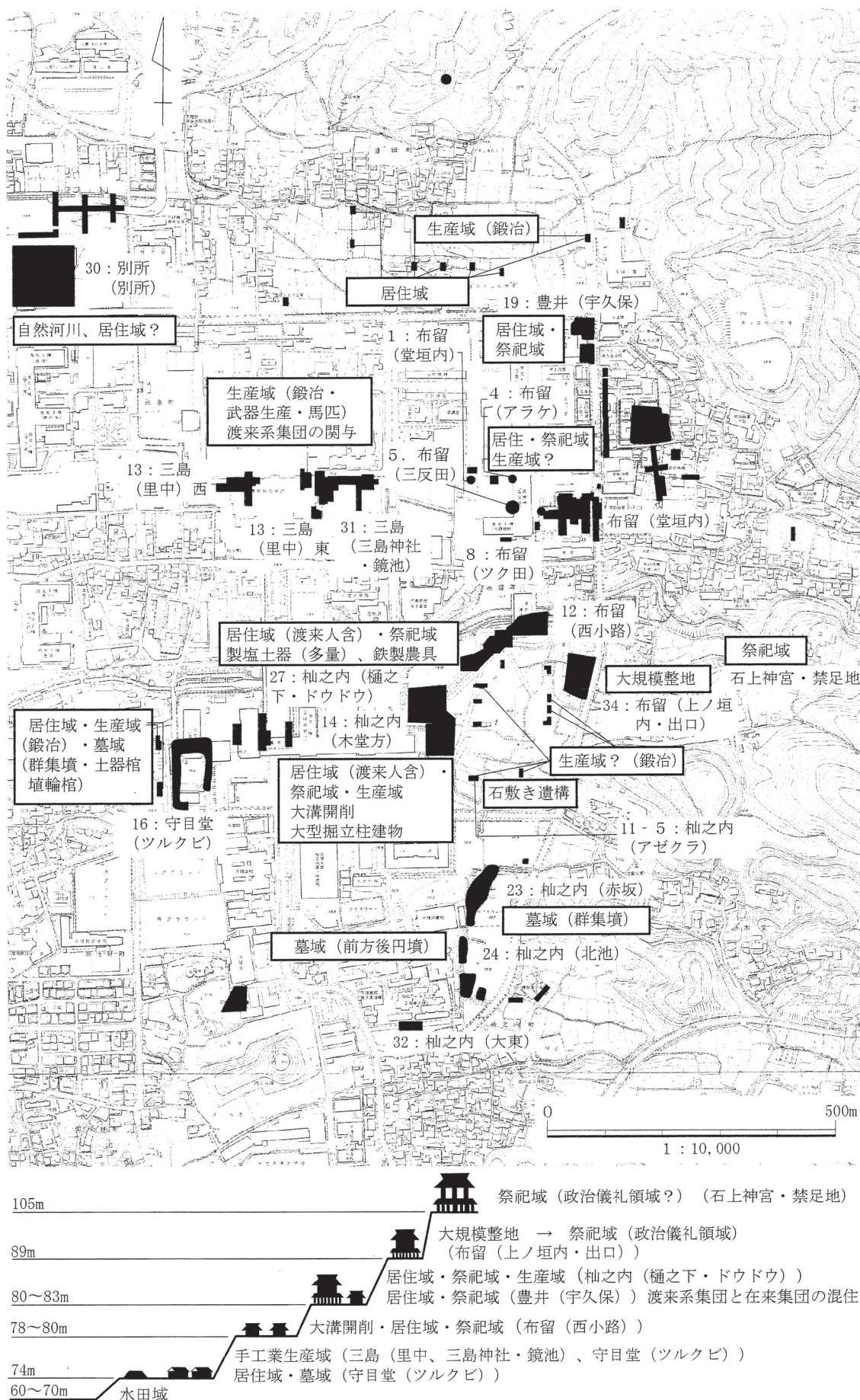


図3 古墳時代中期における布留遺跡 (中久保 2020)

興味深いのは、このような大規模開発が古墳時代中期に実施されているにもかかわらず、当地域の周辺地域には同時期の大型古墳に欠くという事実である。つまり、この祭祀空間と稀少財の生産施設を支配した主体は、布留川流域や奈良盆地東部に古墳を築造する地域勢力ではないと判断できる。これら考古学的事実と、近接する石上神宮には東アジアの王権間の贈答品であった七支刀や鉄盾が存在するという事実を評価するならば、石上・布留遺跡群は、近畿地方中部にあり、列島規模で影響をおよぼす権力、「王権」によって営まれた稀少財の保管（祭祀）と製作の拠点であると判断できよう⁵。石上神宮の神府（神庫）が王権中枢の稀少財の継承において重要な役割を果たしたという理解は、大津透も重視しており（大津 2010）、辻田淳一郎も同型鏡論をふまえて、その管理・継承の場としての石上神宮の役割について注目している（辻田 2024）。

先に紹介した『日本書紀』天武紀をみるかぎり、地方首長由来の稀少財を集積する「石上」の機能は7世紀末まで継続していたと判断できる。つまり、列島内外からもたらされた各種の財は他集団に贈与されそれぞれの地で副葬されるとともに、長期間にわたりこの地で祀られ保管され続けるモノもあったと推定できる。それらを収蔵し、儀礼の対象とすることでその神威を隔離し、「安定化」がはかられた空間こそが後に石上神宮と呼ばれる場なのである⁶。これらは短期的に移動する当該期の王宮とは別原理で運営され、原則的には多数の集住を伴わずに長期間にわたり継続した空間であると想定したい。私は、この祭祀センターの形成と長期継続が、古墳時代における都市なき権力形成を可能とした社会システムの一翼を担っていたと評価する。

7 古墳造営拠点の性格

——権力を形成しない集住と交流

以上のように非継続の王宮と継続的な祭祀センター

の存在を前提としたとき、当該期における最大の労働集約の成果である古墳は、どのような位置づけが与えられるのだろうか。先に紹介した北條の試算によれば（北條 2019）、墳長280mの箸墓古墳の造営には年間250日／500人で工期7.9年を要するという。当然、造営に従事した労働者の食住を支える物資や人員、具体的には、かれらが必要とした食料や燃料を安定的に供給し続ける通年のロジスティクスが存在したと考えられる。つまり、十年単位で食料生産を直接担わない労働者集団が集結し、それを支える市的機能が日本列島の3世紀後半には成立していた。酒井龍一の提言を重視すれば、纏向遺跡群にはこの機能があてはまる。

大阪平野における最初的大型前方後円墳である大阪府藤井寺市の津堂城山古墳の造営と軌を一にして隣接地に登場する津堂遺跡における大型建物群（大阪府文化財センター 2016）も、この機能を担うセンターの一部であるとみられる。

ここでは以上の理解をふまえて、その築造に関わる一時的な集住空間に物資が集約されたという事実を重視したい。大和川流域から大阪平野南部を中心とする東西35kmほどの範囲には、200mをこえる大型前方後円墳が、3世紀後半から6世紀にかけて20基以上築造される。巨視的にみれば、この地域は非農業従事者が集住することを可能とするインフラやロジスティクスが、場所を移転させつつ継続した地域である。ただし、河内平野に大型前方後円墳の築造が開始される4世紀末以降も、王宮は奈良盆地に設けられることが記紀から読み取れる。文献の伝えるヤシロの所在も古墳の集中地とは異なる。つまり、文献上でも考古学的にも、大型前方後円墳集中地と政治拠点や宗教施設は重ならないのである。

各地から集結し、数ヶ月あるいは数年の古墳造営に従事した労働者やそのリーダーの間で、各地の情報や技術の交換が進展したことは想像に難しくない。例えば、埴輪をめぐる技術拡散の議論は、その典型である

⁵ 布留遺跡周辺にも王宮が設置されていることが以下の記載から読み取れる。おおよそ5世紀後半と判断できる『古事記』安康段、『日本書紀』安康即位前紀允恭紀42年に登場する石上の穴穂宮、『古事記』仁賢段、『日本書紀』仁賢紀元年に登場する石上の広高宮、さらに『日本書紀』顕宗即位前紀清寧2年の歌謡では「石上」「振の神櫓」が市辺宮と結びつけて歌われている。これらの記載から、後の顕宗「天皇」である弘計の父、市辺押磐皇子の宮が石上に所在した可能性が指摘されている（溝口 2020: 138）。この記載は、布留・石上遺跡に近接して、一時的に宮が築かれることがあった事実を示していると考えられる。

⁶ 王権に関連する祭祀センターは石上・布留遺跡が最大規模であったとみられるが、より小規模な王権に付随、あるいは地域首長に属する祭祀センターもあったと考えられる。ただし、その多くは古墳築造停止に伴う分立システムの解体によって消失、解消されたとみられる。したがって、各地に存在する式内社等の古社と本稿で提案した祭祀センターを単純に同一視することはできない。式内社とは延長5（927）年にまとめられた『延喜式』によって「官社」に指定された神社一覧であり、平安時代以前から存在したと判断できる。

(廣瀬 2015)。近畿地方における弥生時代から古墳時代の集落動向を論じた若林邦彦によれば、水田域(生産)と居住地点の乖離が明確化するのには古墳時代中期であり、大型前方後円墳の出現がその変化に先行することを重視して、古墳という新たな共同性装置を通じたネットワーク戦略の存在をみいだす(若林 2016: 20)。若林の展望と、ここで想定する前期以来のロジスティクスの存在は矛盾しない。

この空間において、これまで交流の機会が乏しかった遠方に居住する一般構成員間の食生活や習俗の双方向的情報交換も進んだとみられる。南九州と東日本にみられる土師器の類似性やカマドの使用はこのような共同・協働生活を通して、拡散したと考えられる(都出 1993; 杉井 2004)。継続的な都市空間がなくとも、古墳時代社会は、このような機会と場を通して、日本列島広域での同質性を形成したと考えられる。

V まとめ——都市なき権力構造を維持した日本列島独自の社会システム

1 古墳時代における都市機能の分立

本稿では、チャイルドが都市形成論において記念碑的公共建造物造営を重要していたことを指摘し、古代ローマや中国古代などの都市形成をめぐる研究でも聖殿や宗廟が重視されていることを紹介した。一方、日本列島では、すでに弥生時代後半の段階で一部地域での市場的な都市形成が認められたにもかかわらず、次の古墳時代において継続的な都市の発展はみられないことを指摘した。

ただし、4世紀末から5世紀代、すなわち古墳時代中期に相当する時期には約200kmの対馬海峡を渡海する軍事行動が広開土王碑には記録されていること、1,000km以上離れた中国王朝との継続的な外交が中国

史書から読み取れることなどから、中国社会から倭王権として統一的な政体と認識される権力が日本列島に存在していたことがうかがえる。考古学的にも、日本列島各所に類似する形状や埋葬施設を有する巨大な墳墓が近畿中部を中心として数百年間にわたり築造され続ける。

以上の事実関係からは弥生時代のそれと比べて成長した各地のエリートが結びついた一つの政体が4世紀以降に存在したと判断できる。この政体を「国家」と呼称するかはさておき、弥生時代の権力よりも強力なそれが、都市なき古墳時代に形成されていたことに異論はないだろう。

このような認識に基づき、私は西アジアや中国大陆をはじめとする多くの地域で都市に集約されていた権力の形成と維持に不可欠な諸機能が、4～6世紀の日本列島では3つに分立していたとみる⁷。それはA:短期集住・市空間としてのモニュメント(古墳)造営拠点、B:政治拠点である王宮(ヤケ)、C:長期に継続する器物の工房が付加された祭祀センター(ヤシロ)である。Aに該当する遺跡としては津堂遺跡、Bに該当する遺跡として奈良県桜井市脇本遺跡、そしてCに該当する空間として布留・石上遺跡群があげられる。そして、空間的に分化した諸機能を結びつけたのが稀少財の贈与の循環(図2)とその背後に存在した人的関係なのである。

2 住環境維持のための社会機能の分立

では、日本列島外の地域では都市に集約される、あるいは弥生時代には統合されていたA:人口と物資の集中(市)、B:政治機能、C:祭祀センターの諸機能が古墳時代成立期、3世紀後半前後の日本列島になって、なぜ分化したのだろうか。

弥生時代早・前期における水田稲作の導入は適地に

⁷ 弥生時代から古墳時代における権力機構の「分散化」は、すでに都出比呂志によって次のように展望されている。それは環濠集落が弥生時代後期に解体し、首長の居住空間である居館が一般成員の居住空間から分離し(都出 1983, 1989)、古墳時代には権力に付加する交易、生産、政治・宗教拠点がそれぞれ分散していたために都市的景観が形成されにくかったという説明である(都出 1998: 104, 2011: 163; 和田 2003; 菱田 2007)。ただし、それぞれの機能分化と相互の関係については、ほとんど言及がない。その意味において本稿の分析は、これまで存在のみが指摘されていた遺構群を器物の循環として結び付けた点に研究史上の意義があるといえる。

松木武彦は列島内に軍事的緊張が低かったことと自由な商取引が発達しなかったことが、都市のような集約的空間が生まれなかった要因としている(松木 2011: 173)。前者の視点について本稿では未検証であるが、後者の視点については古墳造営のための経済活動が進んだという本稿の理解と親縁性が高いといえる。佐々木憲一はハリスとウルマンの都市複数核モデルを参照し、奈良県御所市の南郷遺跡群において倉庫群や工房、そして大型建物や祭祀施設が別々に立地し、かつ有機的に結びついている状況を重視し、国家段階の都市の端緒であると評価している(佐々木 2007: 332-334)。南郷遺跡群は南北1.7km、東西1.4kmの範囲に各種遺構が拡散しており(坂・青柳 2011: 25)、都出の論じた機能分化とはスケールが異なるものの、遺構論として重要であるが、継続時期が半世紀ほどと短い点は典型的な都市としての理解を難しくさせる。また、近年、青柳泰介は布留遺跡と南郷遺跡群を分析し、これらが地域開発拠点として機能していると論じている(青柳 2024)。

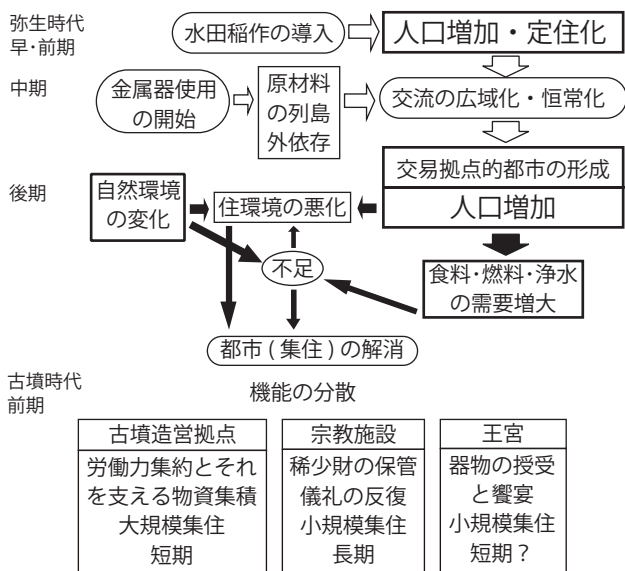


図4 都市形成模式図

おける定住と人口増加をもたらした。中期には金属器の使用が開始されるが、その素材は朝鮮半島南部からの供給による。必需財長距離交易の恒常化が、各地の交易拠点に人口集中をもたらし、都市を形成させたのである（図4）。

ただし、限られた技術での集住の維持には限界があった。生活用水に加えて、農業用水の確保という水資源への要望が強い灌漑水田という生業を営む社会が、人口圧というバイオマス的な要因によって、集住の解消を余儀なくされたという過程を、ここでは想定する。人口増大による水田適地周辺の衛生環境の悪化は、集住による社会効率化のメリットを上回るデメリットとなることは、すでに指摘したとおりである。このような状況を回避する新技術として弥生時代中期初頭に井戸が登場しているものの、集住がさらに進展する弥生時代中・後期に水源の確保や水質汚濁を回避する新たな技術や施設が登場した事実は認められない。水資源に関わる住環境の悪化に加えて、先にあげた食料・燃料供給の限界も集住の継続や拡大には不利に働いたとみられる。つまり、脆弱な技術基盤しか有さない社会における集住の弊害が、そのメリットを上回ったとき、居住の分散が不可避となる。そして、水害や疫病などの予期できぬ状況に対応しうる機能分化に成功した集団のみが、権力を維持、拡大しうる持続性を獲得したと考えられるのである。この点は、『日



図5 復元された南郷大東遺跡（奈良県御所市）の導水施設
（奈良県立橿原考古学研究所附属博物館）

本書紀』崇神紀で疫病の発生が儀礼センターを王宮から分離させる直接的な契機として、語られている点は示唆的である。ここに記紀にみられる崇神紀の「物語」のモチーフがあると推定する。

このようにみたとき、弥生時代終末期に極大化する纏向遺跡は、その前段階に盛行する唐古・鍵遺跡と同じ大和川支流である初瀬川（巻向川）水系の集落であり、纏向遺跡は唐古・鍵遺跡の上流に位置する（寺沢 1979）。つまり、纏向遺跡の成立は水質汚濁を回避するために集住をより上流域に移動させた結果であると理解できる。このような視点でみるならば、布留・石上遺跡群もまた前段階に拠点的な集落が営まれる平等坊・岩室遺跡の上流に位置することは興味深い。ただし、集住を上流域に移動させ、問題を一時的に解決したとしても、それは本質的な解決にはいたらず、その集住を継続的に維持・発展させることは困難であったと考えられる⁸。

さらに古墳時代開始期以降、流水を取り入れ浄水を祀る導水祭祀遺構（図5）が纏向遺跡を含む各地に広がる（青柳 2003）。この事実は、浄水の確保が社会的課題となっていたという以上の想定を補強する。

3 分散した政治集団を結びつける器物の頻繁な授受

では、A：一時的な集住と物資集中が繰り返される古墳造営施設、B：集住度が低く継続度の弱い王宮、そしてC：集住度は低く長期継続的な祭祀センターという3つに分化した諸機能の連動は、十分な文字メ

⁸ 本稿で指摘した食料・水などの供給という物理的限界が、集住の成長を妨げるというモデルは、すでにメソポタミア、インダス文明、マヤを分析したフレッチャーにより議論されていることを村上達也氏（米国：チュレーン大学）より指摘いただいた（Fletcher 1995）。理論的な比較については今後の課題としたい。

ディアを有さず、官僚的集団も未成熟な段階において、どのように達成されたのであろうか。私はこれらを結んだのが、古墳に副葬されるような稀少財の頻繁な授受に表象されるポリティカル・エコノミーであり、その授受を通じた人的関係の再生産である。BやCで見られる食器を中心とした土器の集積は、この場における饗宴行為の存在を示唆する（寺前 2018）。この饗宴の実施と稀少財授受の連鎖こそが、永続的な都市空間を有さない社会において普段は離れて生活する個人や集団を結びつけ、お互いの社会的地位や権限を相互承認する場を提供したと考える。そして、下賜や献上、あるいは対等な贈与とさまざまな形態で循環した財は、一定の規範のなかで古墳へ副葬され、この循環から退場していく（図2）。つまり、財はその循環からつねに一定量が減じ、その陳腐化を抑制することとなる。この循環する財（flow）の供給源となったのが、列島外から入手、あるいは布留・石上遺跡群のような空間で生産され、あるいは収蔵（stock）されていた財であろう。その一部は常にフローにまわされる一方で、七支刀のように永続的にストックされ続ける財もあったと考えられる。とくにCにおいて文献に登場する「神庫」に収蔵された財は、Bに居住する権力者が所持し、Aに副葬される短期にしか地上に存在しない財と異なり、ストックからフローに置換する財の価値やそれぞれの関係性を確認する「キログラム原器」のような役割をはたしていたと考えられる。すでに指摘があるように復古鏡のモデルとして用いられたこともあっただろう（岩本 2023；辻田 2024）。例えば人類学者モーリス・ゴドリエがモースの贈与論を批判的に継承するなかで、譲渡できるモノと譲渡できないモノという2つの分野の相互依存によってのみ社会は存続しうると述べている（ゴドリエ 2000: 52-53；岸上 2017: 17）。図2のような循環する器物もまた、Cの場で収蔵され維持された器物が基準となり、価値が認知されていたと考えられる。副葬品として葬制のなかで消費される器物の価値や意味は、永続的な儀礼空間で継承された「評価」が定まった器物の存在により保証されていたのである。

ここに都市をもたなかったゆえに脆弱だった集団関係を維持するために創出された贈与の循環システム（図2）の意義を、私はみいだす。この循環こそが、分立した3つの機能空間を結びつけ、約300年間にわたる古墳時代社会における権力を再生産し続けたのである。

VI おわりに

皇国史観への反発や反省から、敗戦後の日本考古学では『記紀』の内容を直接的に用いた権力・国家形成論は、表面的にはきわめて慎重となる。それにとって代わるように敗戦前から一部の研究者によって積極的に導入が図られてきた史的唯物論、そして1980年代からは英語圏における社会発展モデルを用いた国家形成論が考古学研究でも盛んとなる。一方、西アジアや地中海世界、新大陸の史資料に基づく諸理論を、自然環境や歴史的脈絡の異なる日本列島史に適応させる是非についての論争も起きた（山尾 1998a ほか）。近年の社会考古学的研究の進展は、戦争や経済的基盤に基づく政治統合のみならず、儀礼を介した社会統合や権力システムの台頭に先行する祭祀センターの登場が議論の俎上にあがりつつある。本稿では、そうした動向をふまえ『記紀』に登場する崇神や雄略といった人格の権力形態や政治的抗争を墳墓の規模や副葬品から議論するのではなく、『記紀』上のヤシロの成立に登場する機能の集約と疫病の弊害という「物語」を、弥生時代の集住が引き起こした弊害と対比させ、石上・布留遺跡の性格とあわせて機能の分立という視点から、日本列島における都市なき権力形成の特徴を明らかにした。

論に残した課題も多い。本稿では分立化の契機として弥生時代後期以降における水資源を中心とした環境悪化を想定した。出土木材の年輪酸素同位体分析の進展によって、当該期の近畿地方を含む中部日本において降水量が増加し、その傾向が紀元後6世紀まで続くことが指摘され、それが集落立地に連動すると解釈されている（若林 2020）。ただし、酸素同位体の変遷が示す湿潤値は一年あるいは多雨期の合計降水量の気候の反映であり、河川や溝を埋め尽くすような短期間の豪雨現象である気象の反映とは必ずしもいえないという注意喚起もある（高橋 2022）。個々の遺構埋没過程や、同一水系における越流堆積の連動などをふまえたモデル化が今後必要となろう。また、6世紀以降の祭祀形態を論じるためには仏教の導入とその影響をヤシロ関連遺構とともに論じる必要もある。これらを今後の課題としてひとまず筆をおきたい。

謝辞

本研究は文部科学省・科学研究費補助金新学術領域研究（研究領域提案型）「出ユーラシアの統合的人類史学：文明

創出メカニズムの解明」A03班 (JP19H05734) の助成による。

参考文献

(日本語文献)

青柳 泰介

2003 「導水施設考」『古代学研究』160

2012 「豪族居館」『古墳時代研究の現状と課題』(下) 同成社

2018 「南郷遺跡群からみた古墳時代における奈良盆地の都市的様相」『古墳時代における都市化の実証的比較研究—大阪上町台地・博多湾岸・奈良盆地—』総括シンポジウム資料集

2024 「布留遺跡と南郷遺跡群—古墳時代中期の奈良盆地の「地域開発拠点」の比較検討—」『布留遺跡の考古学—物部氏隆盛の地—』金沢大学

秋山 浩三

2007 『弥生大形農耕集落の研究』青木書店

秋山 浩三・仲原 知之

1998 「近畿における石廄丁生産・流通の再検討 (I) —池上曽根遺跡の石廄丁製作工程 (上) —」『大阪文化財研究』15、大阪文化財センター

石黒 立人

2004 「弥生集落史の地平 その2—凹線紋系土器期以前の弥生中期—」『研究紀要』5 愛知県埋蔵文化財センター

石村 智

2004 「威信財システムからの脱却」『文化の多様性と比較考古学』考古学研究会

乾 哲也

1996 「弥生中期における池上曽根遺跡の集落構造—都市的集落の解明に向けて—」『ヒストリア』152

岩永 省三

2019 『古代都城の空間操作と荘厳』すいれん舎

岩本 崇

2018 「副葬品と埴輪による前期古墳広域編年」『前期古墳編年を再考する』六一書房

2020 『三角縁神獣鏡と古墳時代の社会』六一書房

2023 「古墳出土鏡の「伝世」にかんする実証的研究序説」『器物の「伝世・長期保有」・「復古再生」の実証的研究と倭における王権の形成・維持』2019～2022年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書、島根大学法文学部

上野 祥史

2018 「古墳時代における鏡の分配と保有」『国立歴史民俗博物館研究報告』211

宇野 隆夫

1982 「井戸考」『史林』65—5

大賀 克彦

2002 「凡例 古墳時代の時期区分」『小羽山古墳群』清水町埋蔵文化財発掘調査報告書V 清水町教育委員会

大久保 徹也

2003 「〈都市〉の断絶と古墳時代の政治構造」『古代王権の空間支配』青木書店

大阪府文化財センター

2016 『津堂遺跡』藤井寺市文化財報告／公益財団法人大阪府文化財センター調査報告書39/273

大津 透

2010 『天皇の歴史』1 神話から歴史へ、講談社

岡田 精司

1998 「大型建物遺構と神社の起源」『日本古代史都市と神殿の誕生』新人物往来社

小倉 淳一

2015 「関東地方における弥生時代の溝」『〈論集〉環濠集落の諸問題2015』〈環濠 (壕) 論集〉刊行会

小澤 毅

1997 「古代都市「藤原京」の成立」『考古学研究』44—3

2003 「古代都市「藤原京」の成立」『日本古代宮都構造の研究』青木書店

2018 『古代宮都と関連遺跡の研究』吉川弘文館

角道 亮介

2021 「中国初期王朝時代における「中心」の形成—祖先祭祀の共有と物質文化—」『社会進化の比較考古学—都市・権力・国家—』季刊考古学別冊35、雄山閣

笠井 倭人

1953 「上代紀年に関する新研究」『史林』36—4

加藤 一郎

2021 『倭王権の考古学 古墳出土品にみる社会変化』早稲田大学エウブラクシス叢書027、早稲田大学出版部

金関 恕

1998 「都市の出現」『古代史の論点』3 都市と工業と流通、小学館

金原 正子・藤田 三郎・豆谷 和之・金原 正明

2004 「唐古・鍵遺跡の花粉分析・珪藻分析からみた植生・環境と弥生環濠機能の変化」『日本文化財科学会第21回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会第21回大会実行委員会

河野 一隆

1998 「副葬品生産・流通システム論—付・威信財消費型経済システムの提唱—」『中期古墳の展開と変革』第44回埋蔵文化財研究集会、埋蔵文化財研究会

2008 「国家形成のモニュメントとしての古墳」『史林』91—1

岸上 伸啓

2017 「『贈与論』再考—人類社会における贈与、分配、再分配、交換—」『贈与論再考—陣原はなぜ他者に与えるのか—』臨川書店

久住 武雄

2007 「「博多湾貿易」の成立と解体」『考古学研究』

53-4

- 2008 「福岡平野 比恵・那珂遺跡群—列島における最古の都市—」『弥生時代の考古学』8、同成社
- 2018 「列島最古の「都市」—福岡市比恵・那珂遺跡群—」『古墳時代における都市化の実証的比較研究—大阪上町台地・博多湾岸・奈良盆地—』総括シンポジウム資料集
- 栗原 薫
- 1991 『日本上代の実年代』木耳社
- 小林 行雄
- 1955 『古鏡』学生社
- 酒井 龍一
- 1999 「纏向遺跡は本当に古代都市か」『図説 古墳研究 最前線』別冊歴史読本23、新人物往来社
- 桜井市教育委員会
- 2013 「纏向遺跡発掘調査概要報告書—トリイノ地区における発掘調査—」桜井市埋蔵文化財発掘調査報告書第40集
- 佐々木 憲一
- 2007 「国家形成と都市」『都城 古代日本のシンボリズム』青木書店
- 笹生 衛
- 2015 『神と死者の考古学—古代のまつりと信仰—』吉川弘文館
- 磯城・磐余の諸宮調査会
- 2019 『脇本遺跡の調査』
- 設楽 博己
- 2009 「独立棟持柱建物と祖霊祭祀」『国立歴史民俗博物館研究報告』149
- 下垣 仁志
- 2011 『古墳時代の王権構造』吉川弘文館
- 2018 『古墳時代の国家形成』吉川弘文館
- 白井 克也
- 2001 「靫島貿易と原ノ辻貿易—粘土帯土器・三韓土器・楽浪土器からみた弥生時代の交易—」『弥生時代の交易—モノの動きとその担い手—』第49回埋蔵文化財研究集会
- 杉井 健
- 2004 「前方後円墳分布圏とその周辺における生活様式伝播の多様性」『文化の多様性と比較考古学』考古学研究会
- 清家 章
- 2010 『古墳時代の埋葬原理と親族構造』大阪大学出版会
- 関 雄二
- 1998 「文明の創造力」『文明の創造力—古代アンデスの神殿と社会—』角川書店
- 関川 尚功
- 2020 『考古学から見た邪馬台国大和説 畿内ではありえぬ邪馬台国』梓書院

高橋 学

- 2022 「書評『気候変動から読みなおす日本史先史・古代の気候と社会変化』」『古代文化』73-4
- 武井 則道編
- 1991 『大塚遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告12、横浜市埋蔵文化財センター
- 武末 純一
- 1998 「北部九州の弥生都市論」『日本古代史都市と神殿の誕生』新人物往来社
- 辻田 淳一郎
- 2018 『同型鏡と倭の五王の時代』同成社
- 2024 「ヤマト王権の威信財とレガリア」『古代王権—王はどうして生まれたのか—』岩波書店
- 都出 比呂志
- 1983 「環濠集落の成立と解体」『考古学研究』29-4
- 1989 『日本農耕社会の成立過程』岩波書店
- 1993 「前方後円墳体制と民族形成」『待兼山論叢』27 史学篇、大阪大学文学部
- 1997 「都市の形成と戦争」『考古学研究』44-2
- 1998 『古代国家の胎動—考古学が解明する日本のあけぼの—』NHK人間大学、日本放送出版協会
- 2000 『王陵の考古学』岩波書店
- 2011 『古代国家はいつ成立したか』岩波書店
- 寺沢 薫
- 1979 「大和弥生社会の展開とその特質—初期ヤマト政権成立史の再検討—」『橿原考古学研究所論集』4、吉川弘文館
- 1984 「纏向遺跡と初期ヤマト政権」『橿原考古学研究所論集』6、吉川弘文館
- 1998a 「集落から都市へ」『古代国家はこうして生まれた』角川書店
- 1998b 「纏向は日本最初の都市」『最新邪馬台国事情』白馬社
- 2011 『弥生時代政治史研究 王権と都市の形成史論』吉川弘文館
- 2016 「古代の都市、都市の古代」『前方後円墳の出現と日本国家の起源』KADOKAWA
- 寺前 直人
- 2001 「流通論／磨製石庖丁の交易」『銅鐸から描く弥生社会』—宮市博物館
- 2006 「生産と流通からみた畿内弥生社会」『シンポジウム記録』5 畿内弥生社会像の再検討、考古学研究会
- 2018 「須恵器の儀礼—土師器との比較をととして—」『季刊考古学』142
- 2021 「弥生・古墳時代における長柄武器の変遷」『年報人類学研究』12、南山大学人類学研究所
- 東藤 隆浩
- 2020 「古墳の築造とその周辺植生」『館報』23、大阪府立近つ飛鳥博物館

豊島 直博

2010 『鉄製武器の流通と初期国家形成』 塙書房

中久保 辰夫

2020 「布留遺跡の古墳時代集落」『研究紀要』第24集、
由良大和古代文化研究協会

中村 慎一

2008 「比較考古学からみた弥生巨大環濠集落の性格」
『弥生時代の考古学』3、同成社

仁藤 敦史

2011 『都はなぜ移るのか 遷都の古代史』 吉川弘文館

浜田 晋介

2011 『弥生農耕集落の研究—南関東を中心に—』 雄山
閣

林部 均

2001 『古代宮都形成過程の研究』 青木書店

2003 「飛鳥の諸宮と藤原京の成立」『古代王権の空間支
配』 青木書店

2008 『飛鳥の宮と藤原京 よみがえる古代王宮』 吉川
弘文館

橋本 博文

2018 「古墳時代豪族居館総論」『古墳と『豪族居館』』
第23回東北・関東前方後円墳研究会大会資料、
東北・関東前方後円墳研究会

坂 靖

2009 『古墳時代の遺跡学—ヤマト王権の支配構造と埴
輪文化—』 雄山閣

坂 靖・青柳 泰介

2011 『南郷遺跡群—葛城の王都—』 シリーズ「遺跡に
学ぶ」079、新泉社

東野 治之

2004 『日本古代金石文の研究』 岩波書店

菱田 哲郎

2007 『古代日本 国家形成の考古学』 諸文明の起源14、
京都大学学術出版会

樋上 昇

2014 「弥生～古墳時代集落における森林資源の管理と
利用」『植生史研究』22-2

日野 宏

2019 『布留遺跡—物部の拠点集落—』 シリーズ「遺跡
を学ぶ」140、新泉社

広瀬 和雄

1996 「弥生時代の首長—政治社会の形成と展開—」『弥
生の環濠都市と巨大神殿』 池上曾根遺跡史跡指定
20周年記念事業実行委員会

1998 「弥生都市の成立」『考古学研究』45-3

2003 「畿内五大古墳群の政治的配置—古墳時代政治中
枢の場をめぐって—」『古代王権の空間支配』 青
木書店

廣瀬 覚

2015 『古代王権の形成と埴輪生産』 同成社

平林 章仁

2019 『物部氏と石上神宮の古代史—ヤマト王権・天
皇・神祇祭祀・仏教—』 和泉書院

福永 伸哉

2020 「古代日本の古墳築造と社会関係」『日本考古墳は
なぜ巨大なのか—古代モニュメントの比較考古学
—』 吉川弘文館

藤田 弘夫

1993 『都市の論理』 中央公論社

藤本 強

2007 『都市と都城』 市民の考古学2、同成社

古市 晃

2002 「都市の成立—古代における集住と統合中枢—」
『都市—前近代都市論の射程—』 ものから見る日
本史、青木書店

2021 『倭国 古代国家への道』 講談社現代新書、講談
社

堀 大介

1999 「井戸の成立とその背景」『古代学研究会』146

北條 芳隆

2019 「前方後円墳はなぜ巨大化したのか」『考古学講義』
ちくま新書、筑摩書房

2021 「東アジア周縁国家概念の提唱」『社会進化の比較
考古学—都市・権力・国家—』 季刊考古学別冊
35、雄山閣

松本 武彦

2011 『古墳とはなにか—認知考古学からみる古代—』
角川学芸出版

町田 章

1986 「都市」『岩波講座日本考古学』4 集落と祭祀、岩
波書店

豆谷 和之

2003 「弥生環濠論—唐古・鍵遺跡から見た場合—」『山
口大学考古学論集』 近藤喬一先生退官記念事業会

2008 「奈良盆地 唐古・鍵遺跡」『弥生時代の考古学』
8、同成社

2012 「弥生の風景」『山口大学考古学論集—中村友博先
生退任記念論文集—』、山口大学人文学部考古学
研究室

溝口 優樹

2020 「石上地域と2つの物部氏」『研究紀要』第24集、
由良大和古代文化研究協会

三好 玄

2013 「集落から見た古墳時代成立過程」『新資料で問う
古墳時代成立過程とその意義』 考古学研究会関西
例会30周年記念シンポジウム発表要旨集、考古
学研究会関西例会

2014 「首長制とは何か」『考古学研究60の論点』 考古
学研究会

2016 「趣旨説明 集落動態からみた弥生時代から古墳
時代」『集落動態からみた弥生時代から古墳時代

- への社会変化』六一書房
- 森岡 秀人・三好 玄・田中 元浩
2016 「総括」『集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化』六一書房
- 森 勇一
1992 「愛知県朝日遺跡（弥生時代）における都市型昆虫群集」『朝日遺跡』II（自然科学編）愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第31集
- 2012 『ムシの考古学』雄山閣
- 八木 充
1974 『古代日本の都』講談社
- 山尾 幸久
1998a 「歴史学・考古学・人類学—溝口孝司論文に触れての偶感—」『考古学研究』44-4
- 1998b 「日本古代都市論」『日本古代史都市と神殿の誕生』新人物往来社
- 吉田 歆
2011 『古代の都はどうつくられたのか—中国・日本・朝鮮・渤海—』吉川弘文館
- 山本 忠尚
1998 「飛鳥京の都市性を探る」『古代史の論点』3 都市と工業と流通、小学館
- 横田 健一
1985 「上代における武器の分与について」『末永先生米寿記念献呈論文集』乾、末永先生米寿記念会
- 吉留 秀敏
1999 「福岡平野の弥生社会」『論争吉備』シンポジウム記録1、考古学研究会
- 吉村 武彦
1996 『日本古代の社会と国家』岩波書店
- 1998 『古代天皇の誕生』角川選書297、角川書店
- 米川 仁一
2003 「纏向遺跡と纏向古墳群に関する一私見—最近の調査結果や出土遺物の流通から見た遺跡の位置づけ—」『初期古墳と大和の考古学』学生社
- 若林 邦彦
2016 「集落研究からみた弥生から古墳時代の変化」『集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化』六一書房
- 2018 「「畿内社会への胎動」はあるのか—唐古・鍵遺跡の評価をめぐる—」『古墳時代の畿内』講座畿内の古代学2、雄山閣
- 2020 「気候変動と古代国家形成・拡大期の地域社会構造変化の相関—降水量変動と遺跡動態から—」『気候変動から読みなおす日本史〈3〉 先史・古代の気候と社会変化』臨川書店
- 若狭 徹
2007 『古墳時代の水利社会研究』学生社
- 和田 晴吾
2003 「古墳時代の生業と社会—古墳の秩序と生産・流通システム—」『考古学研究』50-3
- 下垣 仁志
2013 「都市革命」『立命館大学考古学論集』VI和田晴吾先生定年退職記念論集、立命館大学考古学論集刊行会
- クーランジュ・ド・フェステル
1864 『古代都市』（田辺貞之助1961訳）白水社
- ゴドリエ・モーリス
1996 『贈与の謎』（山内昶2000訳）法政大学出版局
- ウェーバー・マックス
1951 『都市の類型学』（世良晃志郎1964訳）創文社
- （英語文献）
- Childe, V. Gordon
1950 *The Urban Revolution The Town Planning Review*, Vol. 21 Liverpool University Press.
- Blanton R. G. Feinman, Kowalewski Stephen and Peregrine Peter
1996 *A Dual-Processual Theory for the Evolution of Mesoamerican Civilization Current Anthropology Vol. 37*
- Fletcher Roland
1995 *The limits of settlement growth : a theoretical outline* Cambridge University Press.

The Structure Supporting Power in Kofun-Period Society without Cities:

The Integration of Spatially Divided Politics, Rituals, and Funerary Practices through Prestige-goods Circulation

Naoto TERAMAE*

The formation of cities in the Japanese archipelago, based on Gordon Childe's criteria, can be identified as having developed as trading hubs from the mid-Yayoi period onward. However, despite the emergence of greater political power, the presence of cities became rather scarce in the subsequent Kofun period.

This paper analyzes the factors behind this phenomenon using archaeological data and historical texts such as the *Kojiki* and *Nihon Shoki*. The findings suggest that maintaining essential supplies of water, fuel, and food was difficult given the technological and social conditions of the time. Furthermore, inadequate infrastructure likely led to outbreaks of epidemics and other issues, prompting the search for a new system of governance that did not rely on urban centers. As a result, unlike in the Eurasian continent, where power functions were concentrated in cities, the Kofun period developed a unique system in which these functions were divided into three distinct locations: (1) kofun construction sites, which served as short-term settlements and market spaces; (2) small-scale, temporary palaces (*yake*), which functioned as political centers; and (3) religious sites (*yashiro*), which also served as ritual centers with attached workshops for crafting ceremonial objects (prestige-goods).

What connected these spatially dispersed locations was the frequent exchange of rare prestige-goods, particularly non-utilitarian burial items found in kofun, along with ritual feasting. This cycle of prestige-goods exchange played a crucial role in linking individuals and groups living apart in a society without urban centers, providing a platform for mutual recognition of social status and authority.

Keywords

Urbanization, Japanese Archipelago, Yayoi Period, Kofun Period, Prestige-goods

* Komazawa University